

# 「グラスから水を空ける」と「グラスを空ける」

## —離脱型壁塗り代換の分析—

*Gurasu-kara mizu-o akeru and gurasu-o akeru:*

**An analysis of the locative alternation with verbs of removal in Japanese**

川 野 靖 子\*

KAWANO, Yasuko

### 1. はじめに

次の(1)が示すように、「空ける」という動詞は二種類の格体制(～カラ～ヲ形と～ヲ形)をとり、しかも両文がよく似た意味になるという現象を起こす。(2)の「片付ける」も同様である。このような格体制の交替現象は、「壁塗り代換」(あるいは壁塗り交替、場所格交替、等)と呼ばれている(奥津 1981、川野 1997、岸本 2001 等)。

(1)a. グラスから水を空ける (～カラ～ヲ形)

b. グラスを空ける (～ヲ形)

(2)a. テーブルから皿を片付ける

(～カラ～ヲ形)

b. テーブルを片付ける<sup>注1</sup> (～ヲ形)

上記の「空ける」や「片付ける」は離脱を表す動詞であるが、壁塗り代換は、付着や移入を表す動詞でも起こる(奥津 1981、Fukui. et al. 1985、川野 1997、岸本 2001 等)。付着・移入を表す動詞の場合は、～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形<sup>2</sup>の交替になる。次の(3) (4)に例を示す。

(3)a. 壁にペンキを塗る (～ニ～ヲ形)

b. 壁をペンキで塗る (～ヲ～デ形)

\*かわの・やすこ

埼玉大学大学院人文社会科学部研究科准教授、日本語学

(4)a. グラスに水を満たす (～ニ～ヲ形)

b. グラスを水で満たす (～ヲ～デ形)

以下では、(1)や(2)のような離脱を表す動詞による壁塗り代換を<離脱型>と呼び、(3)や(4)のような付着・移入を表す動詞による壁塗り代換を<付着・移入型>と呼ぶことにする。

本稿の筆者はこれまで、主に<付着・移入型>を対象として、壁塗り代換が起こる仕組みを考察してきた(川野 1997、2006a、2009、2016a, b 等)。本稿では<離脱型>に焦点を当て、次の二つのことを論じる。

(5)① (1b)の「グラス」や(2b)の「テーブル」

がメトニミーではなく、それらの語本来の用法で用いられていることを確認し、(1)や(2)が格体制の交替現象であることを改めて確認する。

② その上で、<離脱型>の交替が起こる仕組みを考察し、<離脱型>の交替が、<付着・移入型>の交替とともに、川野(2009)の枠組みで統一的に記述できることを示す。

まず、(5)の①について説明したい。<離脱型>の(1)や(2)は、<付着・移入型>の(3)や(4)とともに

次に(5)の②について述べる。「空ける」や「片付ける」等の動詞は(1)や(2)のように格体制の交替(＜離脱型＞の壁塗り代換)を起こすが、次の「出す」や「たたむ」のように、このような交替を起こさない動詞もある。

- それでは、「空ける」「片付ける」等が交替を起こし、「出す」「たたむ」等が交替を起こさないのはなぜなのだろうか。本稿ではこの問題を考察し、

しかし、「テーブルを片付ける」がメトニミーだとすると、次のような疑問が生じる。それは、「テーブルを片付ける」の「テーブル」が「テーブルの上のもの（皿など）」を表しているのであれば、

「皿を台所に片付けた」が言えるのと同じように、着点ニ格句を出現させた「テーブルを台所に片付けた」も言えるはずであるのに、そうはならない（テーブルを台所に移したという意味でしか解釈できず、テーブルの上のものを台所に移したという意味の文にはならない）という点である。このことは、「テーブルを片付ける」の「テーブル」が「テーブルの上のもの」を表しているのではなく、テーブルそのものを表していることを示しているのではないだろうか。つまり、「テーブルを片付ける」の「テーブル」はメトニミーではなく、本来の用法で用いられていると考えられるのである。

「グラスを空ける（＝中身の水などを出して空の状態にする）」についても、「水を別の容器に空ける」が言えて「グラスを別の容器に空ける」とは言えない（言えるとしても意味が変わる）ことから、「グラス」が指しているのは中身の水などではなく、本来の指示対象であるグラスそのものだと考えられる。

以上の理由から、本稿では、「テーブルを片付ける」の「テーブル」や「グラスを空ける」の「グラス」はメトニミーではなく、本来の用法で使われていると考える。では、メトニミーでないとすると、「テーブルを片付ける」や「グラスを空ける」のような文が成立するのはなぜなのだろうか。

上で述べたように、「皿を片付ける」は着点ニ格句と共起するが（e.g., 皿を台所に片付ける）、「テーブルを片付ける」は着点ニ格句と共起しない（e.g., #テーブルを台所に片付ける）。また、「皿を片付ける」は「テーブルから皿を片付ける」のように起点カラ格句とも共起するが、「テーブルを片付ける」は起点カラ格句とも共起しない（e.g., #ドコドコからテーブルを片付ける）。これらのことは、同じ「片付ける」でも、「皿を片付ける」の「片付ける」と「テーブルを片付ける」の「片付ける」では動詞の意味類型が異なることを示している。

着点ニ格句や起点カラ格句と共起する「（皿を）片付ける」は、位置変化動詞の「片付ける」であり、一方、着点ニ格句とも起点カラ格句とも共起しない「（テーブルを）片付ける」は、状態変化動詞の「片付ける」だと考えられるのである。つまり、「テーブルを片付ける」という文が成立するのは、「片付ける」に（位置変化動詞としての用法だけでなく）状態変化動詞としての用法があるからだと考えられる<sup>注4</sup>。

以上のような本稿の考え方とメトニミー説との違いを、冒頭の(2)の例で整理してみたい。

(8)a. テーブルから皿を片付ける

b. テーブルを片付ける (= (2))

(8b)の「テーブル」をメトニミーとみる立場（「テーブル」がテーブルの上の皿などを指示しているとする立場）の場合、(8a)の「片付ける」も(8b)の「片付ける」も皿などの位置変化を表すことになり、動詞の意味類型は変わらないことになる。したがってこの立場では、(8)は格体制の交替現象とはみなされないことになる。

(9)メトニミー説の場合

a. テーブルから 皿を 片付ける  
位置変化動詞

b. テーブルを 片付ける  
メトニミー 位置変化動詞  
(皿などを指示)

これに対し、メトニミーとは考えない本稿の立場では、(8a)は位置変化動詞の「片付ける」を述語とする、位置変化動詞の格体制の文（～カラ～ヲ形）であり、一方、(8b)は状態変化動詞の「片付ける」を述語とする、状態変化動詞の格体制の文（～ヲ形）ということになる。つまり、(8)は格

体制の交替現象ということになる。

(10) 本稿の考え方

a. テーブルから 皿を 片付ける  
位置変化動詞

b. テーブルを 片付ける  
(テーブルを指示) 状態変化動詞

このように、(8)において a、b 二種類の文が成り立つ理由が、メトニミー説では名詞「テーブル」の指示法に求められるのに対し、本稿の立場では動詞「片付ける」の意味類型の交替に求められる、という違いがある。

本稿のように「テーブルから皿を片付ける」「テーブルを片付ける」や「グラスから水を空ける」「グラスを空ける」を格体制の交替現象とみる見解は、奥津(1981)等をはじめとする従来の壁塗り代換研究の中で既に示されているが、これらは、なぜ「テーブルを片付ける」や「グラスを空ける」がメトニミーでないといえるのかを明らかにした上でのものではない<sup>注5</sup>。本節では、格成分との共起関係の観点からメトニミーとの違いを明らかにし、当該の現象が格体制の交替現象であることを改めて確認した<sup>注6</sup>。

### 3. <離脱型>の壁塗り代換を起こす動詞の条件

「テーブルから皿を片付ける」「テーブルを片付ける」や「グラスから水を空ける」「グラスを空ける」が格体制の交替現象であることを確認した上で、本稿の以下の部分では、このような現象がどのような仕組みで起こるのかを考察していきたい。

1 節で述べたように、「片付ける」「空ける」等の動詞が交替を起こす一方で、次の「出す」や「たたむ」のように、このような交替を起こさない動詞もある。

(11)a. グラスから水を出す

b.#グラスを出す

(12)a. テーブルをたたむ

b. \*テーブルから～をたたむ

つまり、交替を起こすのは一部の動詞に限られるのである。それでは、交替を起こす動詞の条件とはどのようなものだろうか。また、そうした条件の下で交替が起こるのはなぜなのだろうか。この3 節で前者の問題（交替を起こす動詞の条件）を考察し、その後、4 節で後者の問題（3 節で記述した条件の下で交替が起こるしくみ）を考察する。

#### 3.1. 交替動詞の条件を明らかにするためのアプローチ

2 節で述べたように、「テーブルから皿を片付ける」の「片付ける」は位置変化動詞であり、「テーブルを片付ける」の「片付ける」は状態変化動詞であると考えられる。ここから、格体制の交替を起こす「片付ける」や「空ける」は位置変化と状態変化の両方を表す動詞であり、一方、交替を起こさない「出す」や「たたむ」は位置変化しか（あるいは状態変化しか）表さない動詞である、という一般化が、ひとまずは考えられるかもしれない。実際、従来の壁塗り代換の研究ではそのように述べられてきた。たとえば奥津(1981)は、壁塗り代換を起こすのは、移動動詞の格の枠と変化動詞の格の枠とを合わせた二重の格の枠をもつ動詞であると述べている（なお、奥津 1981 のいう移動動詞は本稿のいう位置変化動詞に対応し、変化動詞は状態変化動詞に対応する）。また、岸本(2001)も、壁塗り代換が成り立つのは動詞が移動の意味と場所の状態変化の意味の両方を持つことができる場合にに限られると述べている。

しかしこのような記述では、交替を起こす動詞の条件を明らかにしたことにはならないと思われ

る。「空ける」(交替動詞)と「出す」(非交替動詞)の例で考えてみたい。

- (13)a. グラスから水を空ける
- b. グラスを空ける
- (14)a. グラスから水を出す
- b. #グラスを出す

奥津(1981)や岸本(2001)等の記述に従えば、(13b)が成立するのは「空ける」が状態変化を表すからであり、(14b)が成立しないのは「出す」が状態変化を表さないからだということになる。しかし、「空ける」が状態変化を表すことや「出す」が状態変化を表さないことは、(13b)が成立するという事実や(14b)が成立しないという事実から分かるのであり、(13a)や(14a)を見ただけで予測できることではない。奥津(1981)や岸本(2001)等の研究自体が述べているように、(13a)や(14a)が表すのは位置変化だけだからである。このように考えると、「空ける」は位置変化と状態変化を表すが「出す」は位置変化しか表さない」のような記述は「空ける」は交替を起こすが「出す」は起こさない」という現象を言い換えただけであり、交替を起こす動詞の条件を述べていることにはならないといえる。

それでは、どうすればよいのだろうか。川野(2009)では、「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」のような<付着・移入型>の交替について考察し、交替を起こす動詞の条件を明らかにするには、「位置変化」や「状態変化」の下位類型を考える必要があると論じた。川野(2009)のこの指摘は、本稿で取り上げている<離脱型>の交替にも当てはまると考えられる。再び、上記(13)と(14)の例で説明したい。(13)と(14)から分かるように、同じ〜カラ〜ヲ形をとる動詞(位置変化動詞)の中にも、「空ける」のように交替を起こす動詞もあれば

「出す」のように交替を起こさない動詞もある。このことは、「位置変化」の中に下位タイプがあり、交替を起こす動詞が表す位置変化のタイプというものが存在する(逆に言えば、そのようなタイプに該当しない位置変化を表す動詞は交替を起こさない)ことを示している。交替を起こす動詞の条件を明らかにするには、そうしたタイプを特定する必要があるのである。

同じことが、状態変化についてもいえる。

- (15)a. テーブルを片付ける
- b. テーブルから皿を片付ける
- (16)a. テーブルをたたむ
- b. \*テーブルから〜をたたむ

(15)と(16)の対比から分かるのは、同じ〜ヲ形をとる動詞(状態変化動詞)の中にも「片付ける」のように交替を起こす動詞もあれば、「たたむ」のように交替を起こさない動詞もあるということである。このことは、「状態変化」にも下位タイプがあること、そして、交替を起こす動詞の条件を明らかにするには、それらの動詞が表す状態変化のタイプを特定する必要があることを示している。

以上のように、本稿は、交替を起こす動詞の表す位置変化のタイプや状態変化のタイプを特定することが、交替を起こす動詞の条件を明らかにするための適切なアプローチであると考えられる。このような考えに基づき、次の3.2.と3.3.では、<離脱型>の交替を起こす動詞が表す、位置変化のタイプと状態変化のタイプをそれぞれ記述する。

### 3.2. 交替を起こす動詞の表す位置変化のタイプ —依存的転位—

<離脱型>の壁塗り代換を起こす動詞には、これまで挙げた「空ける」「片付ける」の他、自動詞の「空く」「片付く」「あふれる」がある(自動詞

の場合は、位置変化動詞の格体制が～カラ～ガになり、状態変化動詞の格体制が～ガになる)。以下に、これらの動詞が位置変化動詞として用いられている例（つまり、他動詞であれば～カラ～ヲ、自動詞であれば～カラ～ガという格体制で用いられている例）を挙げる。なお参考として括弧内に交替形である状態変化動詞としての用法も併せて示す。

(17) 交替を起こす動詞が表す位置変化

- a. グラスから水を空ける  
(グラスを空ける)
- b. テーブルから皿を片付ける  
(テーブルを片付ける)
- c. グラスから水が空く  
(グラスが空く)
- d. テーブルから皿が片付く  
(テーブルが片付く)
- e. ゴミ箱から紙くずがあふれる  
(ゴミ箱があふれる)

それでは、(17)の動詞が表す位置変化とはどのようなものだろうか。以下のような、交替を起こさない動詞が表す位置変化との比較により明らかにしたい。

(18) 交替を起こさない動詞が表す位置変化

- a. グラスから水を出す  
(#グラスを出す)
- b. テーブルから皿をどかす  
(#テーブルをどかす)
- c. ゴミ箱から紙くずが落ちる  
(#ゴミ箱が落ちる)

〈付着・移入型〉の壁塗り代換を考察した川野(2009)では、交替を起こす動詞が表す位置変化は

依存的転位であり、交替を起こさない動詞が表す位置変化は非依存的転位であると論じた。川野(2009)のこの記述は、本稿で取り上げている〈離脱型〉の交替にも当てはまると考えられる。

まず、〈離脱型〉の交替を起こす(17)の動詞が依存的転位を表すことをみていきたい。(17)の動詞のうち、「空ける」「空く」「あふれる」については、位置変化する事物の量が場所の容量の観点から規定されるという意味的特徴がある。たとえば、「グラスから水を空ける」や「グラスから水が空く」は、グラスの容量に占める水の割合が0になるまで水がグラスの外に位置変化することを表し、「ゴミ箱から紙くずがあふれる」は、ゴミ箱の容量を超えた分の紙くずがゴミ箱の外に位置変化することを表す。また、残りの交替動詞「片付ける」「片付く」には、空間の美観に影響を及ぼすようなやり方で対象を位置変化させるという意味的特徴がある。「テーブルから皿を片付ける」であれば、単にテーブルから皿を移動させることを表すのではなく、テーブルと皿とで構成される空間の美観が皿の位置変化によって改善されることが表される。

以上のような交替を起こす動詞の表す位置変化に共通するのは、対象の位置変化のあり方が、他の事物に依存して決まるということである（「空ける」「空く」「あふれる」では、対象の位置変化のあり方が場所の容量の観点から規定され、「片付ける」「片付く」では場所と対象物で構成される全体の美観によって規定される）。このようなタイプの位置変化は、川野(2009)における依存的転位に該当する。

これに対し、交替を起こさない(18)の動詞が表す位置変化にはこのような特徴がみられない。これらの動詞が表すのは、川野(2009)における非依存的転位に該当する位置変化だと考えられる。たとえば、「グラスから水を空ける（交替動詞）」と「グラスから水を出す（非交替動詞）」を比べてみ

ると、前者はガラスの容量に占める水の割合が 0 になるまで水が外に位置変化するという意味であるのに対し、後者は位置変化する水の量についての指定がなく（一部が外に出るのでもよいし全部出るのでもよい）、したがって場所の容量の観点からも規定されていない。同様に、「ゴミ箱から紙くずがあふれる（交替動詞）」と「ゴミ箱から紙くずが落ちる（非交替動詞）」を比べてみると、前者はゴミ箱の容量を超えた分の紙くずが外に位置変化することを表すのに対し、後者では外に落ちる紙くずはゴミ箱の容量を超えた分であるとは限らない。また、「テーブルから皿を片付ける（交替動詞）」と「テーブルから皿をどかす（非交替動詞）」を比べると、前者はテーブルと皿で構成される空間の美観が皿の位置変化によって改善されることを表すのに対し、後者は美観への影響を含意しない。

このように、交替を起こす動詞の表す位置変化では、他の事物に依存的なあり方で位置変化が起こるのに対し（依存的転位）、交替を起こさない動詞の表す位置変化では、他の事物に依存しないあり方で位置変化が起こる（非依存的転位）という違いがある。

### 3.3. 交替を起こす動詞の表す状態変化のタイプ —総体変化—

続いて、今度は交替を起こす動詞の表す状態変化がどのようなタイプの状態変化なのかを検討する。以下に、これらの動詞が状態変化動詞として用いられている例（つまり、他動詞であれば～ヲ、自動詞であれば～ガという格体制で用いられている例）を挙げる。なお、参考として、括弧内に交替形である位置変化動詞としての用法も併せて示す。

#### (19) 交替を起こす動詞が表す状態変化

- a. グラスを空ける  
(ガラスから～を空ける)

- b. テーブルを片付ける  
(テーブルから～を片付ける)
- c. グラスが空く  
(ガラスから～が空く)
- d. テーブルが片付く  
(テーブルから～が片付く)
- e. ゴミ箱があふれる  
(ゴミ箱から～があふれる)

また、比較のために、交替を起こさない状態変化動詞の例を以下の(20)に挙げる。

#### (20) 交替を起こさない動詞が表す状態変化

- a. グラスを割る  
(\*ガラスから～を割る)
- b. テーブルをたたむ  
(\*テーブルから～をたたむ)
- c. ゴミ箱がつぶれる  
(\*ゴミ箱から～がつぶれる)

同じ状態変化でも、交替を起こす(19)の動詞が表す状態変化と、交替を起こさない(20)の動詞が表す状態変化には、明らかな違いがあると思われる。具体的には、交替を起こす動詞が表す状態変化は川野(2009)における総体変化に該当し、交替を起こさない動詞が表す状態変化は川野(2009)における自体変化に該当すると考えられる。

まず、交替を起こさない(20)の動詞からみていきたい。これらの動詞が表す状態変化は、対象そのものの属性の変化であるという点で共通する。具体的には、「グラスを割る」「テーブルをたたむ」「ゴミ箱がつぶれる」は対象である「グラス」「テーブル」「ゴミ箱」の形や大きさが変化することを表している。このような、対象そのものに生じる変化（対象の属性変化）は、川野(2009)における自体変化に該当する。

これに対し、交替を起こす(19)の動詞が表すのは、対象そのものの変化ではない。たとえば「グラスを空ける」では、「空ける」という行為の前後でグラスの形や大きさ、その他の属性が変わるわけではない。また、「テーブルを片付ける(交替動詞)」が表すのはテーブルとその上にある物(皿など)で構成される空間全体の美観が変わるということであり、テーブルそのものの属性として美しくなるわけではない。つまり、交替を起こす動詞が表す状態変化は自体変化ではないのである。

それでは、交替を起こす動詞の表す状態変化は、どのようなタイプの状態変化なのだろうか。交替を起こす動詞のうち、「空ける」「空く」「あふれる」が表すのは、対象の埋まり具合の変化である。たとえば、「グラスを空ける」はグラスの埋まり具合が0%になることを表し、「ゴミ箱があふれる」はゴミ箱の埋まり具合が100%を超えることを表している。また、「片付ける」「片付く」が表すのは、対象(テーブル)だけでなく、そこに存在するもの(皿など)も含めた空間全体の美観の変化である。いずれも、対象そのものの変化ではなく、対象と他の事物で構成される状態の変化であり、川野(2009)における総体変化に該当する変化である。

以上のように、交替を起こす動詞の表す状態変化と、交替を起こさない動詞の表す状態変化を比較すると、前者は総体変化であり、後者は自体変化であるという違いがみられる。

以上、この3節では〈離脱型〉の壁塗り代換を起こす動詞の条件を記述した。まとめると次のようになる。

- (21) 〈離脱型〉の壁塗り代換を起こすのは、位置変化動詞の中でも依存的転位を表す動詞であり、状態変化動詞の中でも総体変化を表す動詞である(非依存的転位を表す位置変化動詞や自体変化を表す状態変化動詞

は交替を起こさない)。

#### 4. 〈離脱型〉の壁塗り代換が起こるしくみ

本節では、3節の記述を踏まえ、〈離脱型〉の壁塗り代換が起こるしくみを考察する。

3節で見たように、交替を起こす動詞は、位置変化の下位類型である依存的転位と、状態変化の下位類型である総体変化を表す。この「依存的転位」と「総体変化」とは、同じ出来事に対する二通りの解釈という関係にあると考えられる。すなわち、「依存的転位として解釈できる出来事が、別の見方をすると総体変化としても解釈でき、かつその逆も成り立つ」という関係にあると考えられるのである。たとえば「グラスから水を空ける」は「グラスの容量に占める水の割合が0になるまで水が外に位置変化する」という依存的転位を表すが、これは見方を変えれば「グラスの埋まり具合が変化する」という総体変化とも解釈できる。また、「テーブルを片付ける」は「テーブルとその上のもので構成される空間全体の美観を損なっていたものがそこから位置変化する」という依存的転位を表すが、これは見方を変えれば、「テーブルとその上のもので構成される空間全体の美観が変化する」という総体変化とも解釈できる。このように、壁塗り代換は、現実世界の同じ出来事が、言語の表す意味の世界において、依存的転位と総体変化の二通りに類型化されることで成立する現象だと考えられるのである。

これまで述べてきたように、同じ「空ける」でも、「～カラ～ヲ空ける」は依存的転位(位置変化の下位類型)を、「～ヲ空ける」は総体変化(状態変化の下位類型)を表し、意味類型が異なると考えられる。しかし一方で、両文が似た意味に感じられることも確かである。よって、～カラ～ヲ形の「空ける」と～ヲ形の「空ける」を単に別の動詞として(つまり同音異義語として)捉えるのは



妥当ではないだろう。英語等の他言語でも、似たような動詞が同じ交替現象を起こすことから（e.g. empty books from the box / empty the box of books (Fukui. et al. 1985)）、同音異義語とは考えにくい（同音異義語と考えた場合、日本語で「空ける」等が交替を起こすことと他言語で似たような動詞が同じ現象を起こすことは偶然だ、ということになるが、このようには考えにくいだろう）。「～カラ～ヲ空ける」と「～ヲ空ける」は異なる意味類型に属しつつ、しかしどこかのレベルで共有するものがあると考えべきだと思われる。本稿の捉え方では、その「レベル」とは現実世界ということになる。すなわち、「～カラ～ヲ空ける」と「～ヲ空ける」は、現実世界の同じ出来事を指示しつつ、それを、言語の上で別の種類の出来事として（前者は依存的転位として、後者は総体変化として）述べている、という関係にあるのだと考える<sup>注7</sup>。

## 5. 壁塗り代換の体系的記述 ―〈付着・移入型〉と〈離脱型〉の統合―

1 節でも述べたように、壁塗り代換は、「塗る」「満たす」のような、付着・移入を表す動詞でも起こる。〈付着・移入型〉の壁塗り代換と〈離脱型〉の壁塗り代換を並べて示すと次のようになる（いずれも他動詞の文型で示すが、自動詞の場合はヲ格句がガ格句になる）。

### (22) 壁塗り代換の2つの型

#### 〈付着・移入型〉

位置変化構文：	壁に	ペンキを	塗る
状態変化構文：	壁を	ペンキで	塗る

#### 〈離脱型〉

位置変化構文：	ガラスから	水を	空ける
状態変化構文：	ガラスを		空ける

(22) から分かるように、位置変化構文の形式が、〈付着・移入型〉では～ニ～ヲになり、〈離脱型〉では～カラ～ヲになる。これは、〈付着・移入型〉では移動先が場所句となるため着点ニ格句になり、〈離脱型〉では移動元が場所句になるため起点カラ格句になるということである。また、状態変化構文の形式が、〈付着・移入型〉では～ヲ～デとなり、対象（壁）の変化の結果状態を構成する事物（ペンキ）が材料デ格句として表示されるのに対し、〈離脱型〉では～ヲとなり、材料に当たる事物（水）が表示されない。これは、〈離脱型〉では、材料に当たる事物（水）が対象（ガラス）の変化の結果、そこに非存在になるが、そのような事物を表示する格成分が日本語に存在しないということだと考えられる<sup>注8</sup>。

以上のような違いがあるものの、これらは、「場所に向かう移動（付着・移入型）」なのか、「場所から離れる移動（離脱型）」なのかという、移動の方向の違いから生じる相違であり、〈付着・移入型〉と〈離脱型〉が、ともに、位置変化と状態変化の間の類型交替であるという点は変わらない。だからこそ、奥津(1981)をはじめとする従来の研究でも、〈付着・移入型〉と〈離脱型〉は同じ現象として（すなわち、壁塗り代換として）位置づけられてきたのである。

〈付着・移入型〉と〈離脱型〉とが同じ文法現象である以上、そこには共通の原理が働いているはずである。本節では、〈離脱型〉に関する本稿のこれまでの分析と、川野(2009)における〈付着・移入型〉の分析とが統合できることを示し、これにより、交替の型の別を問わず、位置変化と状態変化の類型交替（壁塗り代換）のしくみが体系的に記述されることを示す。

3 節では、〈離脱型〉の交替を起こす動詞の条件を分析し、交替を起こすのは位置変化動詞の中でも依存的転位を表す動詞であり、状態変化動詞の

中でも総体変化を表す動詞である（非依存的転位や自体変化を表す動詞は交替を起こさない）と記述した。既に述べてきたように、〈離脱型〉の交替を起こす動詞にみられるこのような意味的特徴は、川野(2009)で分析した〈付着・移入型〉の交替を起こす動詞の意味的特徴に、そのまま重なる。以下に〈付着・移入型〉の交替を起こす動詞を挙げる。

- (23) a. 壁にペンキを塗る  
b. 壁をペンキで塗る
- (24) a. 腕に包帯を巻く  
b. 腕を包帯で巻く
- (25) a. グラスに水を満たす  
b. グラスを水で満たす
- (26) a. グラスに水が満ちる  
b. グラスが水で満ちる
- (27) a. 浴槽に湯があふれる  
b. 浴槽が湯であふれる <sup>注9</sup>
- (28) a. 床に紙くずを散らかす  
b. 床を紙くずで散らかす
- (29) a. 床に紙くずが散らかる  
b. 床が紙くずで散らかる
- (30) a. テーブルに花を飾る  
b. テーブルを花で飾る

まず、これらの動詞が表す位置変化が依存的転位であることを確認したい。「～ニ～ヲ塗る(23a)」は、対象（ペンキ）を場所（壁）の表面の形状に沿って薄く広げていくという動作を表し、位置づけられる際の対象（ペンキ）の形状が、場所（壁）の形状に依存して決まる。「～ニ～ヲ巻く(24a)」の場合も同じである。また、「～ニ～ヲ満たす(25a)」「～ニ～ガ満ちる(26a)」「～ニ～ガあふれる(27a)」は、場所（グラス、浴槽）の容量に占める対象（水、湯）の割合が100%になるまで対象を位置変化させることを表し、位置変化する対象

の量が場所の容量の観点から規定される。「～ニ～ヲ散らかす(28a)」「～ニ～ガ散らかる(29a)」「～ニ～ヲ飾る(30a)」は空間の美観に影響を及ぼすようなやり方で対象を位置づけることを表す（「散らかす」「散らかる」はその空間の美観を損なうような状態で物が拡散することを表し、「飾る」はその空間の美観を引き立てるように物を位置づけることを表す）。以上のように、これらの動詞は、「対象が他の事物に依存的なあり方でそこに位置づけられる」というタイプの位置変化、すなわち依存的転位を表すという点で、〈離脱型〉の交替を起こす動詞と共通するのである。特に、「～ニ～ヲ満たす」「～ニ～ガ満ちる」「～ニ～ガあふれる」が表す依存的転位は、位置変化する対象の量が場所の容量の観点から規定されるという点で、〈離脱型〉の「～カラ～ヲ空ける」「～カラ～ガ空く」「～カラ～ガあふれる」に通じる<sup>注10</sup>。また、「散らかす」「飾る」の表す依存的転位は、位置変化のあり方が空間全体の美観によって規定されるという点で、〈離脱型〉の「～カラ～ヲ片付ける」「～カラ～ガ片付く」に通じる。

続いて、〈付着・移入型〉の交替を起こす動詞の表す状態変化が総体変化であることを確認したい。「～ヲ～デ塗る(23b)」や「～ヲ～デ巻く(24b)」が表すのは、対象（壁、腕）がその表面に他の事物（ペンキ、包帯）を伴って一体化した状態になるということであり、対象そのものの変化を表すのではない。「～ヲ～デ満たす(25b)」「～ガ～デ満ちる(26b)」「～ガ～デあふれる(27b)」も、対象（グラス、浴槽）そのものの大きさや形といった属性が変わることを表すのではなく、対象（グラス、浴槽）の埋まり具合が100%になるという変化を表している。また、「～ヲ～デ散らかす(28b)」「～ガ～デ散らかる(29b)」「～ヲ～デ飾る(30b)」が表すのは、対象（床、テーブル）とそこに存在する物（紙くず、花）とで構成される空間全体の

美観の変化であり、対象それ自体の変化ではない。このように、これらの動詞は対象そのものの属性の変化ではなく、対象と他の事物で構成される状態の変化、すなわち総体変化を表し、その点で、〈離脱型〉の交替を起こす動詞と共通するのである。特に、「～ヲ～デ満たす」「～ガ～デ満ちる」「～ガ～デあふれる」が表す総体変化は、対象の埋まり具合の変化であるという点で、〈離脱型〉の「～ヲ空ける」「～ガ空く」「～ガあふれる」に通じる。また、「～ヲ～デ散らかす」「～ガ～デ散らかる」「～ヲ～デ飾る」が表す総体変化は、空間全体的美観の変化であるという点で、〈離脱型〉の「～ヲ片付ける」「～ガ片付く」に通じる。

以上のように、「交替を起こすのは、位置変化動詞の中でも依存的転位を表す動詞であり、状態変化動詞の中でも総体変化を表す動詞である」という記述は、〈付着・移入型〉と〈離脱型〉のいずれにも当てはまるものであり、交替の型の別を問わず、壁塗り代換を起こす動詞の条件を述べたものとして一般化できるといえる。また、ここから、これも〈付着・移入型〉と〈離脱型〉の別を問わず、壁塗り代換は、「同じ現実の出来事が、言語の表す意味の世界において、依存的転位と総体変化の二通りに類型化されることで成立する現象」として位置づけることができる。

## 6. おわりに

本稿では、「テーブルから皿を片付ける」「テーブルを片付ける」のような〈離脱型〉の壁塗り代換について、以下のことを論じた。

- (31) ①「テーブルを片付ける」という表現は、名詞「テーブル」のメトニミーによって成立するのではなく、動詞「片付ける」が状態変化動詞としての用法を持つために成立するのだと考えられる。「テーブル

から皿を片付ける」「テーブルを片付ける」は、位置変化と状態変化の類型交替として（すなわち、壁塗り代換として）位置づけられる。

- ② 〈離脱型〉の壁塗り代換を起こすのは、位置変化動詞の中でも依存的転位を表す動詞であり、状態変化動詞の中でも総体変化を表す動詞である（非依存的転位や自体変化を表す動詞は交替を起こさない）。この条件は、川野(2009)で記述した、〈付着・移入型〉の壁塗り代換（「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」等）を起こす動詞の条件と共通するものであり、交替の型を問わず、壁塗り代換を起こす動詞の条件として一般化できる。また、〈付着・移入型〉、〈離脱型〉の別を問わず、壁塗り代換は、「現実世界の同じ出来事が、言語の表す意味の世界において、依存的転位と総体変化の二通りに類型化されることで成立する現象」として位置づけられる。

## 注

注1 「テーブルを片付ける」は「テーブルを他の場所に移す」という意味でも解釈できるが、ここでは「テーブルの上のものを移してテーブルの上をきれいにする」という意味で用いている。

注2 岸本(2001)に、壁塗り代換とメトニミーの見分け方が述べられているが、なぜ(1b)や(2b)がメトニミーでないといえるのかを明らかにしたものではないと考えられる。この点については注5で述べたい。

注3 「#」は、文そのものは成立するが意図した解釈にはならないことを示す記号として用いている。たとえば(6b)に付されている「#」は、「グラスを出す」という文が、ここで意図している「グラスの中身を出す」という意味では解釈できないことを示している。

注4 「テーブルを片付ける」という文に、「テーブルをどこかに移す」という意味と「テーブルの上のものを移してテーブルの上をきれいにする」という意味があるのは、「片付ける」に位置変化動詞の「片付ける」と状態変化動詞の「片付ける」の二つがあるためである。

注5 岸本(2001)は、壁塗り代換とメトニミーは次のような方法で識別できると述べている。それは、壁塗り代換の「浴槽があふれている」は「浴槽」を「浴槽からお湯があふれている」のようにカラ格に変えることができるが、メトニミーの「算盤をはじく」は「算盤から珠をはじく」とは言えず、「算盤の珠をはじく」のようにノ格にしなければならぬ、というものである。

しかし、岸本(2001)のこの識別法は、「浴槽があふれている」がメトニミーでないことの本質的な論証にはなっていないと思われる。実際、「テーブルを片付ける」は「テーブルから皿を片付ける」のようにカラ格にできるが、靱山(2009)等のように「テーブルを片付ける」をメトニミーとみる立場もある。このような立場では、「浴槽があふれている」もメトニミーとされてもおかしくないだろう。

岸本(2001)の記述が、「浴槽があふれている」がメトニミーでないことの論証にならないのは、「浴槽があふれている」を「浴槽からお湯があふれている」に変えた時点で別の文になってしまっており、「浴槽があふれている」という文を検証したことにならないからである。「浴槽からお湯があふれている」の「浴槽」がメトニミーでないこと（「浴槽」という語で「お湯」を指示しているのではないこと）は明らかであるが、そのことと、これとは別の文である「浴槽があふれている」の「浴槽」がメトニミーかどうかは無関係だろう。「浴槽があふれている」の「浴槽」がメトニミーかどうかを確認するには、この文のまま検証する必要があるのである。したがって、「浴槽があふれている」の「浴槽」がメトニミーでないことを示す上で重要なのは、「浴槽があふれている」の「浴槽」をカラ格句に変えられるかどうかではなく、本稿で論じたように、仮にこの文の「浴槽」が「お湯」を指示しているとした場合に共起するはずの格成分と実際に共起で

きるかどうか、であると考えられる。「浴槽があふれている」がメトニミーであり、「浴槽」という語で「お湯」を指示しているのであれば、「浴槽の湯が洗い場にあふれている」が言えるのと同じように、「浴槽が洗い場にあふれている」と言えるはずであるが、このような表現は成立しない（成立したとしても、「たくさんの浴槽が洗い場にあふれている」という意味になり、元の文とは意味が変わってしまう）。よって、「浴槽があふれている」の「浴槽」はメトニミーではなく、本来の指示対象である浴槽そのものを指示していると考えられる。

注6 本稿では、格体制の違いを重視する立場から、「テーブルから皿を片付ける」「テーブルを片付ける」は格体制の交替現象であると論じた。この見解は、3節以降で論じるように、＜離脱型＞の交替と＜付着・移入型＞の交替の統一的記述を可能にするという点でも有意義だと思われる。一方で、こうした格体制の違いや、格体制の交替現象としての体系的記述を重視せず、「テーブルを片付ける」はメトニミーであるとする考え方もあるかもしれない。これは、言語の記述における立場の違いだと思われる。

注7 奥田(1976)は、＜付着・移入型＞の壁塗り代換にあたる「くちびるにべにをぬる」「べにでくちびるをぬる」について、次のように述べている。

表現される現実がひとしいということは、その連語の内部構造の同一性を意味しはしない。前者（引用者注：「くちびるにべにをぬる」を指す）がとりつけの構造であるとすれば、後者（引用者注：「べにでくちびるをぬる」を指す）はもようがえの構造である。（中略）

連語の内部構造のちがいは、現実のきりとり方のちがひ、きりとしてきた現実の側面の強調を意味する。おなじ現実と言語のがわからことなる風に意味づけられて、それらのうちからひとつを選択することとは、はなし手にゆだねられている。（奥田 1976:9）

上記の記述は、現実世界のある出来事を位置変化（とりつけ）として類型化しているのが「くちびるにべにを

ぬる」であり、その同じ出来事を状態変化（もようがえ）として類型化しているのが「べにでくちびるをぬる」だ、ということ述べたものだと考えられる。井島(2005)や、英語の locative alternation を分析した Pinker (1989)にも、これと同趣旨のことが述べられている。これらは、基本的な発想において、本稿の捉え方と共通すると考えられる。

ただし、3 節で述べたように、壁塗り代換は全ての位置変化動詞において起こるわけではなく、また、全ての状態変化動詞において起こるわけでもない。したがって、厳密に述べれば、壁塗り代換は、同じ現実の出来事が言語において位置変化のある下位類型と状態変化のある下位類型の二通りに類型化される現象であるといえる。3 節では、それがどのような類型であるのかを特定し、それぞれ依存的転位（位置変化の下位類型）と総体変化（状態変化の下位類型）であることを示した。

注 8 <離脱型>において材料に当たる事物が非表示になるのは、あくまでも日本語の場合であり、英語では、"empty books from the box," "empty the box of books"のように of 句で表示される (Fukui, et al. 1985 等)。

注 9 「あふれる」は<離脱型>と<移入・付着型>の両方の交替を起こす、興味深い動詞である。<離脱型>の「あふれる」は「容器等に収まりきらずに外にこぼれる」という意味の「あふれる」であり、「浴槽から湯があふれる／浴槽があふれる」のような形の交替を起こす。一方、<移入・付着型>の「あふれる」は「容器等がいっぱいになる」という意味の「あふれる」であり、「浴槽に湯があふれる／浴槽が湯であふれる」のような形の交替を起こす。「あふれる」に関する詳しい分析は、川野(2006b)を参照されたい。

注 10 「～に～ヲ満たす」「～に～ガ満ちる」「～に～ガあふれる」の表す依存的転位は、「～に～ヲ塗る」「～に～ヲ巻く」等と同じく、「対象を場所の形状に適応させながら位置づける」という種類の依存的転位として捉えることも可能である（たとえば「グラスに水を満たす」では、位置変化後の水の形状がグラスの形状に依存して決まる）。実際、川野(2009)ではそのように記述した。しかし、

本稿では、<離脱型>の交替の「～カラ～ヲ空ける」「～カラ～ガ空く」「～カラ～ガあふれる」との並行性を重視し、「位置変化する対象の量が場所の容量の観点から規定される」という種類の依存的転位として位置づけた。

## 引用文献

- 井島正博(2005)「変化動詞文の格構造」『日本語学論集』創刊号, 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 奥田靖雄(1976)「言語の単位としての連語」教育科学研究会・国語部会（編）『教育国語』45, 麥書房
- 奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127, 国語学会
- 川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点—いわゆる「壁塗り代換」を中心に—」『筑波日本語研究』2
- 川野靖子(2006a)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象—格成分の対応の仕方—」『日本語の研究』2-1, 日本語学会
- 川野靖子(2006b)「構文交替の観点からみた「あふれる」の分析」『香椎潟』53, 福岡女子大学国文学会
- 川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』5-4, 日本語学会
- 川野靖子(2016a)「壁塗り代換は体系的な文法現象である—山田昌裕(2004)「壁塗り代換(spray paint hypallage)—文法現象の存在をめぐる—」への反論として—」『埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 1 小出慶一教授退職記念論文集 ことばの本質を求めて』埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科
- 川野靖子(2016b)「壁塗り代換は、なぜヴォイスのカテゴリーに入らないのか」『埼玉大学紀要 教養学部』51-2
- 岸本秀樹(2001)「第5章 壁塗り構文」影山太郎(編)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 初山洋介(2009)『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』研究社
- 初山洋介・深田智(2003)「第3章 意味の拡張」松本曜(編)『シリーズ認知言語学入門 第3巻 認知意味論』大修館書

店

- Fukui, Naoki, Shigeru Miyagawa and Carol Tenny. 1985. Verb Classes in English and Japanese: A Case Study in the Interaction of Syntax, Morphology, and Semantics. *Lexicon Project Working Paper #3*, Center for Cognitive Science, MIT.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge.

**付記** 本稿は、科学研究費補助金(基盤 C, 課題番号 26370527)による研究成果の一部である。